専大とともに 神田神保町探索 <<1

創立130年を迎える専修大学。神田キャンパス周辺の神田神保町は、古くから「本の街」として知られ、個性派のスポットや飲食店も多い。そんな界隈の魅力的なお店をご紹介する。題して「専大とともに～神田神保町探索」。第1回は女性店主の古書店、松雲堂書店。

▲　店主の野田京子さん

松雲堂書店

女性店主が切り盛り　あふれる漢籍の滋味

松雲堂書店は、神田神保町古書店街の西のはずれ、「専修大学前」交差点すぐそばにある。

店内には漢籍・和書が、中央の棚と両面の壁を見えなくするほど平積みされている。そこに一歩踏み入れると、滋味豊かな古書の香りに包まれた漢籍の世界が広がり、思わず一書、手に取ってみたくなる。

▲　店頭にも古書が積まれ…

創業は1900（明治33）年。店主の野田京子さんは2代目義太郎氏夫人で、90年、同氏の急死により店を引き継ぐことになった。「娘（初香さん、瑞奈さん）や同業者の皆さんに支えられました」。初代・文之助氏からの漢籍一筋の伝統を守る。

なかでも充実しているのは漢詩関連書だ。和綴じの紐を結び直し、虫食い本には裏打ちをほどこすなど細やかな仕事も評判だ。出版事業も行っており『詩語集成』『詩語辞典』の両辞書は、詩作になくてはならない同店の隠れたベストセラー。

顧客は中国文学や漢文の教員、愛好家がほとんど。日髙義博学長・理事長もよく顔を見せる。

「漢詩は奥深さが魅力。ここに来ると世界が広がります」とは、漢文を広める運動をする埼玉県の中学校教諭、小金澤豊さん。

店舗の上が住まいになっている。60年代、「朝、窓を開け、専大（旧校舎）の大きな時計で時刻を確認するのが習慣でした」と京子さん。

夫の宮元宏明さんと共に仕入れや新刊販売を担当する次女・瑞奈さんは西神田小時代、本学の鳳祭が楽しみだった。「学ランを着た応援団の〝お兄さんたち〟が作るうどんがおいしかったですよ」と、共にビルになる前の校舎の雰囲気を懐かしむ。

＊松雲堂書店　東京都千代田区神田神保町3の1、☎とFAX03（3261）6498

日本センターで研修

小林　夏季さん（経済4）

ラオスで各国のNGO活動調査

ラオスの首都ビエンチャンにあるラオス日本センター（国際協力機構＝JICA＝のラオス日本人材開発センター）で今春、小林夏季さん（経済学部国際経済学科4年次）がインターンシップを体験した。

同センターの相互理解室で日本文化の紹介を行ったほか、NGO（非政府組織）活動を視察。実りある2週間を過ごした。同センターが専大生

▲　〝托鉢〟体験中の小林さん＝右

を受け入れるのは小林さんで2人目。

小林さんは昨夏、ラオス、タイの海外特別研修（指導・飯沼健子准教授）に参加、国際事業や政府・国際機関などでラオスの経済事情を視察したほか、ラオス国立大学（本学の協定校）や大学施設内にある同センターで人々と交流。「ラオス人との触れ合いが最高の思い出になった」と言う。

同国は60～70年代のベトナム戦争の影響を受けており、米軍が落としたクラスター爆弾の被害は今なお続いている。医療・リハビリ、車いす、義足の普及や不発弾除去を目的としたNGOが多数活動しており、日本などから技術移転も活発だ。

小林さんはインターンシップで、国際経済学科で学んだ開発経済の知識を基に、諸活動の目的や展望を調査した。

「開発協力には効果的で持続的な援助が必要。加えて、国民性の理解、コミュニケーションが大切」と感じた。

ビエンチャンに住む現代の若者の生活や考え方にも触れた。

ラオスは経済的には最貧国に位置するが「問題が起きても『ボーペニャン』（『大丈夫』の意）と言って済ませてしまうおおらかな国。貧しくても精神的なたくましさを感じました。そこが日本との決定的な違いかもしれません」。

次に同国を訪ねるときに、農村部の人々と交流したいと言う。

スカッシュ・日本一を目指して

全日本アンダー23選手権で初優勝

河野　文平さん（法4）

▶　試合中の河野さん

法学部4年次の河野文平さんは、6月に行われた第20回全日本アンダー23スカッシュ選手権で見事、初優勝を果たした（前回出場時は2位）。

2016年オリンピックの新競技候補になっているスカッシュは、相手の心理を読み、常に先の戦法を考え、瞬時に壁への入射角と反射角を計算して3次元の方向（床と前後左右の側面）にボールを打つ知的な競技。トップ選手ともなると、時速200㎞のスピードボールを打つ、ダイナミックさも魅力だ。

母親の麗良さんの影響で、中学から本格的に取り組んだ河野さん。本学ではスカッシュラケット愛好会に所属し、関東大学選手権は3連覇中。昨年の全日本学生選手権でも2位という実績を誇る。今年からは、海外遠征でより強い相手と対戦し、さらに上を目指そうと、自分でスポンサーを探すなどして、活動範囲を広げている。

「1時間、全速力で走り回れる体力と同時に、瞬発力と判断力も求められます。自分で立てた戦略どおりにボールを打ち込めたときが最高です」とその魅力を話す。パワーよりもスピードで勝負するタイプだが、外国人選手に負けないパワーもつけたいと、筋力トレーニングにも取り組むようになった。

「法学部で培った論理的に考えるということが、戦略にも役立っています。大学の4年間は、やりたいことを見つけ、思う存分できる恵まれた時間。最大限活用して、『日本一』を目指します」と力強く話してくれた。11月末の全日本選手権での活躍に期待しよう。

※写真提供・㈳日本スカッシュ協会

地域の課題を解決するインターンシップ

川崎市と連携して、キャリアデザインセンターが実施している課題解決型インターンシップに参加している商学部の神原理ゼミと前川明彦ゼミから、活動レポートが届いた。

ユニバーサルファッションを普及させるには？

●神原ゼミ（商3・江川　典宏）

神原理ゼミは「ユニバーサルファッションの普及活動」をテーマに、9人がアソシエCHACOでインターンシップを始めている。「ユニバーサルファッション」とは障がい者、高齢者などの身体に不自由のある方が着る服を健常者の服と同じようにおしゃれな服にすると共に、着やすくした工夫をデザインに取り込み、おしゃれを楽しむというもの。

活動の第一弾として、6月14日に多摩区総合庁舎で行われた「多摩ふれあい祭り」の中でユニバーサルファッションショーのイベントスタッフとしてお手伝いした。5人がモデルとなり、私は音響係として、ステージ裏で音量の調整を行いながら、ショーを見守った。

今回の目的は、来場した地域の方々の反応にじかに触れ、「ユニバーサルファッション」の認知度がどれほどなのか知るというもので、チラシを配ったお客さんに「これは何ですか？」と聞かれることも多く、認知度が低いという現状を知ることとなった。小さなイベントではあるが、こうしたことを積み重ねていくことで、「ユニバーサルファッション」の普及につながっていくのだと思う。

イベントを通して、学生にとっては普段ふれあうことがない方と接し、さまざまな話を聞かせていただき、課題解決のためにこの先どうしていくかを考えるきっかけにもなった。

日本はこれから高齢化社会を本格的に迎える。高齢になる前に「ユニバーサルファッション」について知識をもっているべきだと考えた私たちは、川崎市立多摩病院の売店に、以前から置いてあるアソシエCHACOの商品をもっとお客さんの目に付くような場所に置いてもらうように交渉しようと思っている。

どれが正解なのかは、まだ分からないが、まずは動くこと。自分たちのできることを地道に実行していきたいと思っている。

「地域通貨」を利用して活性化を目指す

●前川ゼミ（商3・割栢　靖謙）

「地域通貨たま」

前川明彦ゼミは、多摩区内の人と人、事業者、団体などをつなげるためのツールとして07年10月にスタートした「地域通貨たま」の活動に参加している。ゼミで、地域再生やまちづくりを学んでいるため、地域通貨を利用した地域活性化に一緒に取り組むことで、実践的に学ばせていただいている。

多摩区内の大学に通っていながら今までのことを知らず、インターンシップのチラシで初めてその存在を知った私たち。地域の人たちに「たま」を知ってもらうためには、まず自分たちが理解しなくてはと、6月20日に行われた「登戸東通り商店街ナイトバザール」に参加した。

同商店街は、環境や人に優しい商店街をめざして「エコ運動推進商店街宣言」をしていることもあり、イベントでは、マイ食器やリユース食器を使用することで「たま」がもらえる仕組みに。もらった「たま」は、子どもたちに人気のゲームコーナーで使うことができ、エコの意識を高めながら「たま」を広く知らせるようになっていた。

子どもたちと一緒に廃油（使用済みてんぷら油）からろうそくを作り、その廃油キャンドルを使っての「キャンドルナイト」も行われた。キャンドルをハートの形や「eco」という文字に配置し点灯。一人ひとりが環境について考える時間となり、温かな光を前に子どもも大人も感動した様子だった。

予想以上に地域の方々が大勢参加し、住民交流ができるこのようなイベントの大切さを裏方に回って改めて実感した。今回の体験を生かし、「地域通貨たま」をさらに多くの人々に知ってもらえるように、今後の活動を展開していきたい。